

1996 年度下半期山行報告書

目次

- 10/10～11 個人山行 小川山
10/12～13 冬山偵察 北アルプス・燕岳～蝶ヶ岳
10/19～20 春山偵察 北アルプス・五竜岳
11/3～4 三ツ峠岩登り
11/10 ボッカ訓練 丹沢・大倉尾根
11/19～12/1 雪上訓練 富士山・吉田大沢
12/13～19 冬合宿 北アルプス・燕岳～大天井岳
12/29～1/1 個人山行 北アルプス・鹿島槍ヶ岳天狗尾根
1/17～18 山スキー 飯縄山、黒姫山
2/13～15 個人山行 南アルプス・仙丈岳
2/20～23 八ヶ岳合宿
3/8～9 個人山行 八ヶ岳
3/19～21 春合宿 北アルプス・五竜岳
ゲレンデ
フリートーク（宗像）
特別寄稿「凍傷に関する総括、自己批判そして教訓」（田形 OB）
フリートーク（立木）
「96 年下半期を振り返って」

『新葉樹』創刊のことば

僕がこの部に入ったとき、そのとき 5 年生だった古瀬さんが「これが最新号なんだ」といって渡してくれたのが『針葉樹 14 号』である。この 10 年以上前の最新号を今でもときどき開いてみては、OB 総会のときただ飲んで騒いでいるだけの（ごめんなさい）OB たちが、実はすごいところに登ってらしたんだなあと思ったりする。また記録としても貴重だと思う。なぜか古本屋で一冊 1400 円で売られていたりするのだ（定価は 10000 円らしい）。そろそろ 15 号を作るころかなー、と言いつつ大体みんな卒業していくのである。

さて『新葉樹』とはただの僕の思いつきである。この人数では『針葉樹』を

作るのは物理的に不可能である。とはいえ、慶応や学習院も最近、報告書を充実させているようだし、うちも表紙ばかりでなくて内容も充実させたいものだ（と思ったのは僕だけなのだが）。ということから、まったく関心を見せない西井さんと、ちょっと協力する気のある立木と、やる気ばかりが空回りする僕とで文章を持ち寄った（または持ち寄らない）のが『新葉樹』である。このかなり部が危機的な状況で『新葉樹』という言葉を持ち出すのは、春になり、それまでの枝だけの樹に青々と葉が茂る、そんなふうはこの部も元気に、息づいていきたい。そんな願いを込めたつもりである。そして、いつかは立派な「針葉樹」に育って行きたいものである（落葉樹の針葉樹って何だっけ）。さて内容は思いつきである。とりあえず、フリートークを書こうと言ってみた。文章の量は関心の程度を示しているだろう。僕の機関誌になっていなければ幸い。いつまで続くかのかって。創刊号が出てそれでおしまいというのはよくある話だが、まあ、僕が卒業するまでは続いていることでしょう。楽しんでいただければ幸いです。早く一年生こーい……。 宗像充

わけもなく巻頭言

「新葉樹」創刊号を飾る前衛的な表紙はいかがだったでしょうか。あとはこの冊子が創刊号で息絶えてしまわないように……と願うばかりです。立木啓太

今年もちゃきちゃき登るぞ。夏の間は岩と沢に行くパートナー募集してます。いつでも登りに行きます。最近部室の周りではうずらが繁殖している。よく運動しているようです。ムナカタ

報告書に巻頭言書かすなよー。西井

この冊子が創刊号で息絶えるかどうかは立木が負っているということ知らないのだろうか？

1. 個人山行 小川山ハードフリー入門 参加メンバー：宗像、西牟田 OB、田形 OB、古瀬 OB
10/10 曇り

田形さんが立てた計画にのって、初めて小川山にやって来た。ガマスラブで何本か登った後、親指岩を探すが場所が分からず、結局、リバーサイドにやって来る。シーズンも過ぎているので人も少ない。ブラック・シープ 5.9+、アウト・オブ・バランス 5.9、マダム・バタフライ 5.10a にトライするが、この間までフリーなど意識もしていなかった僕にとっては、まだ 5.10a を登るのは難しかった。マダム・バタフライで古瀬さんがフォールしたとき、捻挫した。痛そうである。テントに戻ると、カモシカコースを散策していた西牟田さんはもう缶ビールを握っていた。古瀬さんを駅まで送って、今夜は三人で宴会。

10/11 曇り

昨日場所が分からなかった親指岩で小川山レイバックを登って、リバーサイドに戻り、昨日登れなかったマダム・バタフライを登り、妹岩に移動し、愛情物語 5.8 をリードする。それからカシオペア軌道 5.10a にトライするが、やっぱり登れなかった。最後に父岩に行って、小川山物語 5.9 を登ったところで雨が降りだし、今日はおしまい。このあと僕はそのまま冬山の偵察に行き、田形さんは古田 OB と、アメリカに行く川名 OG と沢登りに行った。今日はカモシカコースを反対回りで歩いてきた西牟田さんは東京に帰って行った。

《感想》 それほどフリーを熱心にやっていたわけではないが、やっぱりフリーはおもしろい。これからもどんどん登ろう。たいしてうまくなってはいないのだが。

文責・宗像

2. 冬山偵察 燕・大天井・常念・蝶縦走 西井・宗像

10/12 晴のち曇り

6:10 中房温泉～6:50 第1ベンチ～7:30 第2ベンチ～8:10 第3ベンチ～8:50 富士見ベンチ～9:10 合戦小屋 9:30～11:00 燕岳 11:20～11:50 蛙岩～12:15 大下り頭～13:20 2699m～14:05 切通岩～14:50 大天荘

直前に立木は風邪を引き欠席、宗像は OB 山行から直接来るということで、一人寂しく国立を発つ。中房温泉までは天気もよく登山者も多い。赤布を付けつつぼちぼちと歩く。富士見ベンチからは富士山も見ることができ、気分を良くしていたのだが合戦小屋あたりから雲行きが怪しくなりはじめたので、燕を往復した後合羽を着る。蛙岩の穴は難無く通り抜けることができた。為衛門

吊岩でザイルはることはあっても、蛙岩でははることはないだろうと思う。切通岩の前の鎖場の辺りでしとしとと降り始める。切通岩からの上りここを直登するのかとちょっとぞっとする。左側の大天井の斜面はいかにも雪崩れそうに見える。大天井を冬道づたいに上り大天荘につく頃には雨は霰になっていた。

10/13 晴れ

5:40 発～6:15 東天井～6:25 横通岳～7:40 常念小屋～8:35 常念岳 8:50～10:55 2592m～11:55 蝶槍～12:30 横尾分岐～12:50 森林限界～17:30 上高地

昨日までの雨はやみ朝から空が青い。冬来たときに東天井の南の尾根に迷い込みそうで少し不安である。新米リーダーは何かと気苦労も多い。東天井を下ったコルで雲海と日の出を見ることができた。常念の上り辺りから宗像のスピードがぐんぐん上がる（私のスピードが落ちたという言い方もできる）。常念・蝶の間は問題はないだろうなと思いつつ、赤布を付けつつゆっくり進む。蝶から見える槍・穂高はもう雪をかぶっていた。最後のバスで下山する。

文責・西井

春合宿偵察 五竜岳 宗像・立木

10/19 曇り

9:05 地蔵の頭 9:40～一の背髪 10:45 中遠見 13:55 五竜山荘（往復） 15:30 五竜山荘

朝、神城に着く。曇天。テレキャビンが動き出すのは 8:30 なので、それまで寝ることにする。アルプス平は雨。中遠見手前は切れているが特に問題はない。ガスのせいで鹿島槍も五竜も見えずかろうじて八方尾根が見える。白岳の登りで雪が降りだす。五竜山荘横にテントを張り、急いで五竜岳を往復することにする。あっという間に積雪が足首ほどになり、雪山の様相になる。夏道どおしにトラバースして本峰直下で直登。頂上に立つのは本番のお楽しみにということで直下まで行って引き返す。

10/20 雪

7:15TS 発 8:15 西遠見 9:20 中遠見 10:50 アルプス平

風・雪強く下りるか判断に迷うが、山荘の人も小屋を閉め降りるようなので共に降りる。積雪はすねから膝程度。営業最終日のテレキャビンに滑り込み下

山。

文責・立木

4. 三ツ峠岩登り 西井・宗像・立木・田形 OB・楊

11/3 曇り

最近、部としてはあまりやってこなかった岩登りを企画してみた。楊さんが遅れたため、昼過ぎに三ツ峠に着く。そのため、一般ルートから天狗の踊り場まで登っただけなのに慣れない僕たちにはえらい時間がかかり、テントで待っていた楊さんを心配させてしまった。

11/4 晴れのち曇り

慣れない西井がなかなか登れないため、あまり登れず、僕としては欲求不満。西井はその後のアブミの練習で宙づり状態になり、通りすがりの登山客に写真を撮られていた。

登ったルート：一般ルート、十字クラック、No.14 クラック、権兵衛チムニー、大根おろし、草溝クラック、地藏ルート

文責・宗像（西井さんの担当だったのに）

5. ボッカ訓練 丹沢・塔ノ岳 西井、宗像、立木

11/10 晴れ

本だの鉄アレイだのをザックに詰め家族の冷たい視線に見送られて家を出てきた立木であるが、大倉口でさらに漬け物石ほどの大きさの石を詰めさせられる。それでも最初のうちは良かったが、花立の前あたりから 5 歩歩いては立ち止まるという状態。何とか頂上に着き、しばしシカと戯れる。下りの見晴茶屋からの夜景はきれいであった。

文責・立木

6. 雪上訓練 富士山吉田大沢 西井、宗像、立木、田形 OB、田中（一橋 WV）

11/29 曇り

5:00 起床～6:20 馬返し～8:55 五合目 10:00～12:30 七合目雪訓場所～雪訓 13:10～15:50 五合目

ワンゲルの田中が山岳部に入るか迷っているというので連れて来た。前日、田形さんのクルマで馬返しまで入る。五合目までは快調に歩く。去年よりはだいぶ着くのが早い。佐藤小屋の隣にテントを張り出発する。途中アイゼンをつける。1年は慣れないせいか、えらい時間がかかる。アイゼンのつけ方ぐらい事前に確認しておいてほしいものだ。七合目あたりでザックをおき、場所を探す。雪はクラストしていないのでかなり右のほうに移動して雪訓を始める。今日はアイゼンでの歩行（直登、直下降、トラバース、ダイヤモンド）とピッケルストップを繰り返す。雪が軟らかいのであんまり満足のいくものであったようには思えない。五合目に下るとき、田中が捻挫で遅れる。時々、突風が吹き耐風姿勢を教える。

11/30 雪

5:10 起床 7:00～8:15 七合目～9:00 雪訓場所（七合三勺付近） 15:00～15:30 七号五勺付近 TS

足を痛めた田中を残して再び七合目に向かう。今日もアイゼン歩行から初めて、ピッケルストップ（ウルトラマン、一回転）を教え、スタックカット、自己脱出をする。天気悪く、昨日同様、時々突風が吹き雪もちらつく。休憩のときザックを置いているところに戻ると西井のザックがなくなっている。風で 100 m 下まで吹き飛ばされていた。訓練を続けていると『岳人』の取材スタッフがやってきて、僕らの雪訓の写真を撮っていった。壊れたゴーグルをかけていたら、アップで写真を撮られてしまった。今年の 12 月号に載っているかもしれない。訓練を終えて尾根上に上がり、鳥居のひとつ上の小屋にツェルトを張ってビバークとする。

12/1 曇り

5:10 起床 7:30 発～7:45 吉田大沢 9:50～10:50 五合目 11:30～12:50 馬返し

よく眠れなかったわりには寝過ごしてしまった。天気はそれほど悪くはないのだが、風が強いため頂上アタックはあきらめて、再び吉田大沢にもどり、昨日不十分だったスタックカットと自己脱出の復習をして、最後にスタックカットで吉田大沢を下った。五合目までもどると、一日半暇を持て余していたであろう田中が待っていた。さっさと撤収し、馬返しまで駆け下りる。クルマから眺めた富士山は雲も晴れ、頂上に行けなかったのが何とも悔やまれる。

文責・宗像

7. 冬合宿 燕岳・大天井岳 西井、宗像、立木

12/13 急行アルプスにて離京。

12/14 晴れ

5:30 宮城ゲート～9:50 中房温泉 (25) ～11:35 第 1 ベンチ (15) ～12:50 第 2 ベンチ (25) ～14:50 第 3 ベンチ

タクシーにて宮城まで入る。ここからはひたすら 16 km の林道歩きである。中房温泉で水を汲み合戦尾根の急登に入る。取り付き付近はほとんど雪がないが徐々に増え膝あたりのラッセルになる。予定は富士見ベンチまでだったが無理せず第 3 ベンチにテントを張る。

12/15 晴れのち曇り

7:15 TS 発～9:45 富士見ベンチ～11:15 合戦小屋～14:30 燕山荘～15:05 燕岳

悪夢は夜中に訪れる。起きてみると、なんとピッケル・アイゼン・メットのバンドがずたずたに切られていた。どうやら犯人はキツネのようである。西井さんのアイゼンは持ち去られるところだったようで 2、3 メートル離れた所に放置されていた。一同途方に暮れるがシュリングで代用するなどしてなんとか使える状態にした。合戦小屋をすぎ少し登ると合戦沢ノ頭に出る。視界が開け稜線の向こうに槍の穂先が見える。ここでアイゼンに履き替える。燕山荘直下の雪崩れそうな斜面も問題ない。燕山荘に荷物を置いて燕岳を往復する。岩峰群の中にある頂上からの眺めは最高。剣・立山から薬師岳、そしてはるか槍・穂高まで望める。戻って他パーティーのいない、きれいな冬季小屋にテントを張る。

12/16 雪

6:10 燕山荘 TS 発～7:45 蛙岩～9:30 為衛門吊岩 (1h) ～13:00 切通岩～15:50 大天井岳～16:10 大天荘

燕山荘から蛙岩までは 1 ピッチ。蛙岩はくぐるが篠竹などが邪魔で苦勞する。為衛門吊岩は右側を巻こうとするが雪の状態が悪いのでザイルを張ってやや右側から直登する。切通岩は鎖を掘り出してさらに 1 ピッチ張る。トラバースルートは使わず直登し、頂上直下は右側から回り込む。天候が悪化してきたので、頂上でもゆっくりできず、すぐ大天荘の冬季小屋に入る。

12/17 沈。かすかに東大天井岳が見えるが、風雪強い。

12/18 雪

6:15TS 発～9:00 切通岩～11:35 蛙岩～13:00 燕山荘～15:30 中房温泉

天候は良くないが出発。大天井岳の下りで東側の斜面に少し入り込んでしまう。立木が滑りとっさにピッケルを刺して止まるなどアイゼンワークの稚拙差を痛感。トラバースして夏道の道標にでて、切通岩への下りで1ピッチ、ザイルを出す。為衛門吊岩ではザイルをフィックスしてクライムダウン。蛙岩も来るときと同じように中を通り、燕山荘に早めに到着する。そのまま下りてしまうことにする。暗くなって中房温泉に着く。温泉に入ってビールを飲みさっぱりする。

12/19 曇り

朝、のんびり出発。中房川には猿の群。長い長い林道歩きにうんざりした頃、宮城のゲートが見えてきた。

文責・立木

8. 個人山行 北アルプス鹿島槍ヶ岳天狗尾根 宗像、田形 OB、古瀬 OB

12/29 快晴

6:30 大谷原～7:10 大川沢出合の橋～8:45 荒沢出合 9:00～11:30 1600m付近
11:45～12:40 1900m付近～15:00 第2クーロアール 15:30～16:15 天狗の鼻手前小ピーク TS

田形さんが風邪をひいたため、出発を1日延ばして入山。大谷原から快調に歩き出すが大川沢ではなく大冷沢沿いの林道をたどっていたことが判明。引き返し、大川沢の右岸から歩き始める。雪は膝下で一応トレースもある。トレースをたどって右岸から左岸の夏道をたどったが右岸の方が歩きやすそうにもみえた。荒沢出合の手前で右岸に戻っていやらしい高巻きを終え、荒沢出合に降り立つ。出合から100m少々の所から取り付く。渡渉で落ちる者一名あり。雪が少ないためほとんど藪こぎと化した尾根を引っ掛かりながら登り、尾根が広くなってくる。1800m付近はどこでもテントを張れそうである。テン場の跡もある。第1クーロアールはトレースをたどっているうち通り過ぎてしまったらしい。いまいち判然としない。アイゼンも輪かんもつけずに歩いていたが、日も高くなり、雪がぐさぐさのトラバースが出てきたのでザイルを出そうと用意

していると、後から来たパーティーがノーザイルで行ってしまった。トレースができたのでザイルを出したのが少しむなしいが、トラバースを終えると第2クローアールだった。雪はぐさぐさだったが、アイゼンをつけ、クローアール途中から1ピッチ、ザイルを張る。天狗の鼻が目の前に見える小ピークに何張りか張れそうなスペースがあり、そこをTSとする。渡渉で落ちた某T氏は夜も鍋をひっくりかえされ、再び濡れていた。不幸なことである。

12/30 快晴

5:30 起床 7:30 発～8:00 天狗の鼻 8:10～9:35 最低コル 9:25～10:00 P4 10:10～11:55 小舎岩 TS

寝過ぎす。ぐずぐずしていると、隣に張っていた関西岩峰会に先に行かれてしまった。天狗の鼻を前のパーティーが登って行くのをぼんやり見ていると、そのパーティーのすぐ横で雪庇が落ちたのだろうか、雪煙が巻き起こった。恐ろしいことだ。天狗の鼻からは鹿島北壁がよく見える。トレースを追うだけなので、最低コルまでは左側を問題なく進む。最低コルでは前のパーティーがザイルを出している。順番待ちである。1ピッチ fix して後はトレースをたどる。P4まで来ると、また前の方が詰まっている。悪気はないのだがルート工作してもらっているような気分だ。2ピッチ fix して、小舎岩に着く。すぐ上のP5の取り付きまで行ってみると、再び順番待ちである。6、7人いるパーティーなので時間がかかる。2時まで待ったが、この先テン場があるか分からないので、小舎岩まで戻って、テントを張る。天気予報では明日も好天らしい。東尾根のパーティーがすぐ近くに見える。僕たちと一緒に入山した立教大OBのパーティーが天狗の鼻にテントを張っている。

12/31 晴れ

5:00 起床 7:00 発～9:15 荒沢の頭 9:30～10:00 北峰 10:10～10:40 南峰 11:00～11:50 冷池 TS

早速、P5に取り付く。古瀬さんトップで右に5mほどトラバースした後、左上する。登り着いた所で早くも立教大パーティーに抜かれてしまった。さらに、1ピッチザイルを伸ばす。左から回り込むように登る。難しくはないが、切れ落ちているので高度感がある。そこから斜度のある登りを終えると、荒沢の頭に飛び出す。昨日はテン場を心配していたが、狭くてもまあ張れる所はあったようだ。北峰に着くと、剣がよく見える。立教大パーティーは引き返していった。吊り尾根を慎重にたどり、南峰に着くと人がうじゃうじゃいて興ざめである。

快晴の中、冷池への稜線散歩は北八でも歩いている気分だった。こんなんでいいのだろうか。昼前に冷池に着いたが、明日も天気予報では好天と言っている。他のパーティーが次々と下りていく中、セオリーを無視して早々とテントを張る。春のような陽気の中、昼寝をして幸せ。大晦日の夜は大福からぜんざいを作り、マーボー春雨のむなしさを取り繕ったのでした。

1/1 晴れ

4:00 起床 5:50 発～7:00???～8:00 1978m 8:10～9:00 分岐 9:20～10:00

鹿島部落

爺ヶ岳で初日の出を見るべく、ヘッドランプを点けて出発。いくつかピークを越え、爺ヶ岳を黒部側から登っていると、それまで離れて後ろを歩いていた古瀬さんが猛然と追いついてくる。登り着いてその理由が分かった。太陽は完全に昇ってしまった後でした。東尾根はトレースばかりで駆け下りる。鹿島部落へ下りるところは地面が露出していて、木の葉で足が滑り、いやらしい。なんか一番緊張するところだったような気もする。鹿島部落に下り着き、気合いを入れて望んだ鹿島槍はあっけなく終わったのでした。

《感想》 冬山での経験不足を補うべく、身を没するほどのラッセルや、吹雪、厳しいルート取りなど、気合いを入れて望んだ山行だったが、結果的に奇跡のような4日連続の好天に恵まれて、あっけなく終わってしまった。しかも、望んだのではないにせよトレースをうかうかとたどって歩くのが大部分で、自分たちの実力を試すという点では、不満足な点もある。冬の鹿島天狗尾根をトレースしてきました、というにはおこがましい気分である。とはいえ、鹿島槍に登ってきたのは事実なのだから、それはそれとしてラッキーでよかったと思う。
文責・宗像

9. 山スキー 飯縄山・黒姫山 宗像、立木、田形 OB、淵沢 OG

1/17 曇天

9:30 スキー場～11:30 霊仙山～12:30 飯縄山～13:20 霊仙山～16:30 スキー場

カラフルなスキーヤーたちにまじって飯縄リゾートスキー場のリフトに乗って上に上がる。ここからはシールをつけたスキーでの登高になる。スキー場のやかましい音楽を背に樹林帯の急登に入る。まあまあペースについては行けたが傾斜のきついところは少々緊張する。樹林を抜けると眺めが広がる。霊仙

山に着くとスキーを外しデポして輪かんに履き替える。飯縄山へはいったんコルに下り登り返す。飯縄山山頂は 360 度の絶景。八ヶ岳、後立山から妙高、戸隠まで白く輝いている。霊仙に引き返し、スキーで下る。転びまくって足を引く張る自分に比べ、淵沢 OG の華麗な滑りには感心させられる。結局、淵沢 OG、田形 OB からずいぶん遅れてスキー場に到着する。その後、温泉につかってさっぱりする。

1/18

田形 OB と淵沢 OG は黒姫山へ。宗像と立木はひたすらゲレンデ練習。立木は昨日の反省をふまえて斜滑降から練習。田形 OB と淵沢 OG の帰りが遅く少々やきもきする。

文責・立木

コラム

この山行において、山スキーパーティーの帰りが遅いため、ゲレンデに残ったパーティーが在京 OB と連絡をとり、ご心配をおかけするという不手際がありました。幸いにも山スキーパーティーがその日のうちに下山したため、結果的にご心労をおかけするほかは何事もなく山行を終えることができました。原因はいくつか考えられますが、朝の出発が遅かったにも関わらず、そうした場合の山スキーパーティーとゲレンデパーティーとの間の事前の打ち合わせがうまくいっていなかったことが最大の原因とかがえられます。十分に反省し、今後こういうことのないよう努力していくつもりです。

ご心配をおかけした古瀬 OB と引地 OB には誠に申し訳ありませんでした。

● フリートーク

「まだまだできる？ 兼松トラバース」

2月のある暖かい昼下がり。いつものように兼松講堂の石垣でボルダリングをしていると、守衛がやってきて、

守衛「ここを登っちゃいかん」

宗像「何ですか」

守衛「むかし、ここが白い粉で真っ白になって禁止になったんだ」

宗像「じゃ、それ使わなければいいじゃないですか」

守衛「とにかくだめだ。理由は学務課で聞いてくれ」

というわけで、僕はそのあと学務課で30分ほど口論することになった。そこで僕はいつも計画書をもって行くときに応対する人達3人と、屁理屈には屁理屈で応戦し、結局のところ兼松を登ることの禁止は解けなかったのである。だいたい、このあいだ僕が登っていたときは何も言わなかった人もいて、禁止されているということさえ知らなかった人達がこねる屁理屈でも、お役人とも思える強情さと人数的な優勢をもってすれば何もこわいものはないのである。その理由は、

① チョークで汚れる。

② 石垣の風化が早まる（兼松は文化財じゃ）。

③ 兼松は本来登る目的で作られたものではない。登るんなら他でやってくれ」と、ざっと3つにまとめられると思う。ちなみに以前禁止になったときは①の理由だけが問題とされたようで、②③はなんかその場で考えたような取って付けたような感じだった（以前禁止になったという話も聞いたことがない）。まあ、こういう理由でもその場ではなかなか反論が見つからないものである。というわけで、この場をかりて言わせてもらおう。

▽ ①については使わなければ問題ない。これが理由で禁止したというわりには当局もこの理由はあっさり引っ込めてしまった。

▽ ②について、削れているのは石垣じゃなくて、こっちの靴底じゃ。と言いたいのだが、兼松は砂岩なので多少砂が飛ぶのは事実。とはいえ、与えられた形状の岩を登るのがボルダリングの原則なのだからもうちょっとわかってほしいよなあ。こっちだって気をつけているし、苔なんかそのままにしておくよりも風化は遅くなるんじゃないの。

▽ だいたい、兼松の石垣が見た目にも形が変わってしまう（そんなことはないと思うが）のと、兼松が崩壊してしまうのとどっちが早いんよ。今だって柱を足して支えとるんやないか。

▽ 文化財保護の観点から言うんだったら、岩に傷をつけて、ペンキまでつけてしまつとる立て看をそのままにさせとくのはどうということよ。それで文化財の管理しとるんやったらちゃんちゃらおかしいやないか。

▽ だいたい見るだけの文化財なんちゃ、意味なかるうに。そんなに文化財が大事なら石垣の周りに柵でも立てときゃよかるうが。

だんだんなまってきたので文体変更。

▽③についてはたいして意味があるとは思えない。そんなこと言い出したらトイレ (……以下、原紙 p 8 欠如)

10. 個人山行 南アルプス・仙丈岳

2/15 曇り

4:30 起床 6:20 発 7:20 双児沢 7:30~8:20 ニゴリ沢下 8:40~9:28 戸台大橋 9:40~10:20 戸台口バス停

テントの外に出ると、雲が急に出てきた。何事もなく下る。戸台川の河原歩きは嫌気がさしてくる。鋸岳が見えることぐらいが救いだ。黒川沿いの林道歩きをしていると、親切な方が軽トラックで戸台口バス停まで送ってくださった。文責・田中

八ヶ岳山行 西井、宗像、立木、田中、田形 OB

2/20 晴れ

朝一に中央線を茅野まで行き、行者小屋に入山。途中、天気図なんかをとっていたため二人ずつバラバラと登り、全員が行者小屋に着いたころには日も暮れて薄暗くなっていた。

2/21 吹雪

風が強く、吹雪いているので沈。雪もやんだので 11 時から 3 時間ほど地藏尾根の途中で雪訓をする。雪はぐさぐさではあったが一日中寝るよりいいだろう。自分が運動不足であることを再確認する。夕飯前に田形さんが来る。

2/22 雪→吹雪

風もあり、雪も若干降っているが、何とかかなりそうなので御八回りをすることにする。赤岳の登り、文三郎道の森林限界を過ぎた辺りから風が強くなってきたので目出帽をきちんとかぶり直す。赤岳の頂上からは案の定何も見えない。何も見えない山頂ほど面白くないものもない。核心部を早くやり過ぎそうと横岳に急ぐ。横岳の登り南に斜面が切れたところでザイルを 1 ピッチ張る。そこで少し晴れ間が見える。しかし横岳の頂上では何も見えない。横岳から硫黄の地中、もう 1 ピッチザイルを張る。硫黄小屋の辺りでは空も結構広くなってく

る。硫黄岳頂上からは赤岳鉱泉がよく見える。しかし頂上から森林限界までの、短い距離ではあるが風が猛烈に強く赤岳鉱泉まで下りると、私と立木は頬に、田形さんは頬と指に凍傷ができていた。

2/23 晴れ

3人も凍傷になったため岩登りはあきらめ降りることにする。記録はなくしました。

文責・西井

《特別寄稿》

「凍傷に関する総括、自己批判そして教訓」

以下は、田形の個人的な分析ですが、少しでも皆様の参考になればと思い、そして自分への反省の意味も込めて書きました。(省略)

1997年2月22日(土)に八ヶ岳にて凍傷になる。場所は左手人差し指、中指、薬指そして右手中指。特にひどいのは、左手中指、薬指であり、3月3日から11日まで入院加療をおこなう。幸い切断には至らず、4月7日現在は左手中指、薬指が第二関節より真皮(というのかな)の状態であり、普通にはものを持ってない。

凍傷にいたった状況

97年2月22日に宗像以下学生4人とともに行者小屋のテントを出発。気温はマイナス20度、風も非常に強く、雪が少しちらつくといった天気だった(東京でも今冬最低気温で、風が強かったとのこと)。天気が良ければ赤岳主稜の登攀の予定だったが変更し、文三郎道から赤岳頂上、横岳、硫黄岳へと縦走し、赤岳鉱泉へ下りる計画に変更した。稜線に上がるとさらに風が強い。目出帽をするも、これだと少し凍傷になるかなと思いながら進む。パーティーのオーダーは宗像が先頭で、間に学生が3人、そしてラストが田形というのが基本。

縦走自体に問題はなく、赤岳鉱泉に下山。ここで手袋を外したところ、左手中指、薬指が第二関節より真っ白になっており、まったく曲がらない。パーティーの他のメンバーは顔に軽い凍傷をおったほかは、軽く指が痺れている状態とのこと。田形は急いでテントに戻り、体温ほどのお湯で患部を温める。翌朝には患部はパンパンにはって水ぶくれ状態になっていた。

手袋としては、薄い手袋一枚のうえにグローブを一つという装備。稜線で休

憩が 2 回あった際に、グローブに少し雪が入ったようだ。

また、オーダーがラストということで、学生で一番遅い者に合わせて歩いたため、自分のペースを保てなかった。

縦走途中で手の血行をよくするための配慮は欠いていた。

入院・治療について

当初は職場近くの大学病院に通った（以前、軽い凍傷になったときはここで済ませた）が、このままでは危ないと言われ、凍傷治療で有名な金田正樹医師（整形外科）がいる聖マリアンナ医科大学東横病院（川崎市中原区小杉町）で 3 月 3 日に診てもらった。すぐに入院せよと言われ、3 月 11 日まで 9 日間入院した。その後も通院している。入院中の治療方法としては、朝と夕方の 1 日 2 回、血液の流れをよくするための点滴の投与がすべて。

自己批判そして教訓

指の血行をよくするために、もっと配慮をすべきだった（ユベラ等を利用する）。

手袋をもう一枚重ねるべきだった。

グローブに雪が入らないようにすべきだった。

自分のペースで歩けなくても、その場で足踏み等し、血液循環に配慮すべきだった。

すぐに凍傷治療に詳しい医師がいる東横病院に行くべきだった。

1 1. 個人山行 八ヶ岳行者小屋 宗像、古瀬 OB

3/8・9

この間、田形さんの凍傷で登れなかった赤岳主稜を登るべく、再び古瀬さんとやってきた。8 日は快晴のなか入山して、明日の好天を少しも疑わず、夜は古瀬さんがワインと僕の持ってきた日本酒と、隣のテントからもらったウイスキーで宴会。ところが、朝起きてみるとどんよりと曇り、上のほうは吹雪いているようだ。古瀬さんは休めないで、泣く泣く下山して入院中の田形さんの見舞いに行った。わざわざ行者小屋まで呑みに行っただけのような気がする。

文責・宗像

1 2. 春合宿 北アルプス五竜岳遠見尾根 宗像、立木

3/19 晴れ

8:45 アルプス平リフト上発～9:35 1892m 9:45～10:35 中遠見 10:45～12:15
西遠見手前 TS

急行アルプスで 4 時頃神城につく。バスで五竜遠見スキー場に着く。エスカ
ルプラザは開いていて、テレキャビンが動くまで中でごろごろする。テレキャ
ビン、リフトを乗り継いで歩き始める。古いトレースが一応ついている。週間
予報では低気圧が来るというので心配していたが、天気はよい。遠くまでよく
見える。トレースもあり、雪もしまっているので快調に歩く。ほとんど頭を使
わなくてすむ。小遠見はトラバースして、中遠見を過ぎ、問題なく大遠見につ
く。大遠見からの稜線上には 2 パーティーほど張っている。西遠見について時
点で五竜山荘まで行ける時間だったが、無理をせず西遠見手前にテントを張る。
五竜が目の前によく見える。

3/20 晴れ

4:00 起床 5:45 発～7:15 五竜山荘 7:45～8:50 G II 手前コル 9:00～9:30 五竜山
頂 9:45～11:45 五竜山荘 11:55～12:55 西遠見 TS

予定では今日は五竜山荘までだったので、撤収して出発、さくさくと決まる
アイゼンが心地よい。白岳の登りに篠竹をベタ打ちする。降雪後は雪崩れそう
な斜面である。五竜山荘に荷物をデポし、サブ行動の装備で出発する。G0 はト
ラバースして G II を直登する。一応古いトレースがついているのでノーザイル
で慎重に歩く。思ったよりも難しくはない。五竜直下の登りは右の雪壁を直登
すれば問題ない。だれもいない山頂で鹿島、剣、白馬まで広がる景観を楽しむ。
こんなに条件がいいのなら唐松まで行けたらう。立木が軽い捻挫になったと
いうが歩けるので下山に向かう。五竜の下りは後ろ向きで下り、G II の下りは
練習もかねて、ザイルを 2 ピッチほど出す。初めて雪山でトップをする立木の
ザイルワークはまだちょっとぎこちない。五竜山荘まで戻ると、1 パーティーが
設営をしていた。まだ昼前なので、とりあえず西遠見まで戻ることにする。白
岳の下りは雪がぐさぐさになっていて、一步ごとにだんごをたたき落とさねば
ならず、こわい思いをする。時間的には今日中に降りれるのだが、合宿を 2 日
で終わらせてもな一、と西遠見にもう一回テントを張る。それ以前に、立木は
バテて下りる気力がなかった。

3/21 晴れ

4:00 起床 5:55 発～6:55 二の背髪 7:15～7:45 アルプス平

撤収をしていると、下から数パーティー登ってくる。昨日登頂していてよかった。赤く照らし出された鹿島の北壁を背に歩き始める。いつかは登ってみたいものだ。大遠見まで来ると、かなりたくさんのパーティーが上がってきていた。急ぐ理由もないのだが、下りだから早くなる。二の背髪まできてまだテレキャabinは動いてないだろうと思い直し、写真を撮りまくる。しかし、下山してみてもフィルムがちゃんと入ってないことが判明。冬合宿同様、写真は一枚もありません。五竜遠見スキー場の上にはでっかいテントが張られていた。だれもないスキー場の中をアイゼンを効かせてアルプス平まで駆け下る。雪の少ないスキー場の下の方はテレキャabinから見ると地面が露出していた。

ちなみに今日は進級発表の日です。駅から西井さんに電話して無事3年生になっていることが判明。松本で祝勝会を開いて帰った。

《感想》

当初、唐松まで行く予定だったが、人数の都合上、五竜往復に止めることにした。正月同様、好天に恵まれたため予定以上のペースで歩くことができた。経験をつけるという意味では、まともや不十分な合宿となってしまったということは否めない。また、このような条件では唐松まで行けたであろうことは予想できたが、はたして実際に二人で唐松まで行ったとして、条件が変わったときに適切な対応ができるかどうかは未知数である。その意味で、この部の経験不足はまだ解消されていないということをしっかりと肝に銘じておく必要がある。それでも、好天に恵まれ無事五竜の登頂を果たしたことは一つの成功である。3日間ともあれほどの景観を楽しめたということは立木にとってはいい経験になっただろう。一つの雪山を登り終えたということを自信にして、次のステップの足掛かりにはできたのではないかと思う。今年は地味でも自分たちの力が試される山行をやりたいと思っている。

文責・宗像

● フリートーク

「悲しきメモリアル」

うーん、こんなことがあってもいいのだろうか。なんと昨年度の冬合宿・春

合宿・八ヶ岳の写真が全滅したのである。シャッターを押すたびにみよーに軽い音（キュウリを真ん中でパキンと割ったような、いや、正確に言うとセロリをサクッとかじったような）音がしていると思ったらフィルムは全く巻かれていなかったのである。ああ……。あの数々のカメラを前にしたバカなポーズ、アホな表情は何だったのだろうか（うまく撮れていたにしても、あまり見たくないような気もするが）。冬合宿の写真が全滅したのを知って呆然と立ちつくしたあの瞬間。

今度こそは…げっ、うそでしょ……のあの瞬間。

うーん走馬燈のようによみがえる。とりあえず、我々には、写るんですレベルがちょうどいいという教訓が得られた一連の騒動なのであります。少々、いや、かなり大げさな立木のフリートークでした。

13. 《ゲレンデ》

- 10/6 広沢寺 宗像、古瀬 OB
- 10/16 日和田 宗像、立木、淵沢 OG
- 11/17 湯河原幕岩 宗像、立木、田形 OB、古瀬 OB
- 11/23 広沢寺 西井、宗像、立木、田形 OB、田中（一橋 WV）
- 12/8 湯河原幕岩 宗像、田形 OB
- 12/25 鷹取山 宗像、立木
- 1/3 日和田 宗像、古瀬 OB
- 1/12 鷹取山 宗像、立木、田形 OB
- 1/15 城ヶ崎 宗像、田形 OB
- 2/11 広沢寺 宗像、立木、田中（一橋 WV）
- 2/17 日和田 西井、宗像、淵沢 OG、田中（一橋 WV）
- 3/31 湯河原幕岩 宗像、立木

《96年下半期を振り返って》

何事もなくあっさり終わった夏合宿も明けて、10月からまがりなりにも動き出したこの部も冬合宿に向けて順調に滑り出すかに見えた。が、そんなに甘くはなかった。11月になると偉そうなことを言っていたわりには1年の岩浪が辞め

る。それにつけて、「いまそんな山に登るモチベーションがないんですよ」という決まり文句をおっしゃる立木先生を慰留する。西井さんはあくまでオプチミストで、とりあえず自分をつなぎでよいと公言する。ワングルは人数が多くてやりたいことができないから、とりあえず 3 月まで山岳部と一緒に登ってみて入るかどうかが決めます、とあって期待を抱かせてやっ来て来た田中は山岳部をめいっぱい利用したあげく、「やっぱり山岳部は人数が少ないから」というわけのわからん理由でワングルに戻っていく。こんな話を聞くたびに、山岳部の存在意義って何なんじゃ、と考えたりしてどこまでもブルーになっていく。このこと自体がまあ、沈滞している証拠である。と、まあこんなことを書いて見たが、この部には昔から別に珍しいことではないだろうし、他大学の山岳部にもないことはない話であろう。ましてや、部員に意識改革を求めるつもりはもうとうない。何言ってみても、変なところで我が強いこの部員にはうるさく聞こえるだけらしい。もちろん、山の中までそんな感じであったわけじゃない。山に行ったら行ったでそれなりに面白いし、合宿は弱いパーティーは弱いなりにそれなりに充実していたと思う。とはいえ、山じゃないところでこんながたがた言われると、山に行く気も失せてしまうと思いませんか。山への情熱などとたいしたものでもないが、もうちょっと気持ちよく山に行かせてくれよ。

なんて偉そうに書いてみたが、結構自分も我がままをやっ来て来たのである。立木には山のよさを知ってもらう前に、岩に引っ張り回し、リーダーの西井さんには自分がリーダーじゃない無責任さから何かと文句をつけ、パートナーに困ると忙しい OB をかりだし、そのうえ自分が引っ越しなんかで忙しいときは部のことも忘れて山に行かなくなる、と部員には迷惑な話で、OB にとっては小うるさい後輩である。でもね、もうちょっと山に行ってもいいではありませんか。腐っても山岳部である。腐った魚は食えないというのももっともだが、腐ってるかどうかなんて食ってみないと分からないじゃないですか。もっと自分で計画を立てて山に行こうではありませんか。昔、日曜の朝テレビをつけると軽快な音楽とともに「暗いと不平を言うよりも、進んで明かりを点けましょう」という言葉が流れてきたものです。けだし名言。ぐだぐだ文句をならべるよりは、自分で何かやってみろよ。

というわけで、今年もばりばり登るつもりである。具体的にはって、個人的にはいろいろ考えているのだが、正直言って 1 年生入らないと部としてはイメージわかないな。ただ無責任なだけの言い訳なのだが、地道にステップアップ

していくしかないですね。何かひとつのようだが、個人こじんが山を楽しめればよいと思っている。

宗像 充

以上